

令和元年度連携排砂計画(案)及び連携排砂に伴う  
環境調査計画(案)に関する関係団体からの意見と対応について

【令和元年度連携排砂等の実施計画について】

関係団体名	関係団体の意見	対応状況
海面漁業 関係団体	<p>① 平成30年度の連携排砂計画については、実施機関の過失により堆積した大量の堆積土砂を、同一年内に分割して排砂するという前例のない計画であり、漁業への短期的・長期的な影響が強く懸念されたことから、2018年5月22日開催の第36回排砂関係機関連絡会議（以下「連絡会議」）において、我々は「海面漁業者の不安を払拭しないかぎり連携排砂の実施に同意することはできない」との意見を表明しました。</p> <p>しかし、我々の不安払拭に至る具体的な回答や対応が無いまま、平成30年度連携排砂が強行されました。このことについては、2019年2月15日開催の第37回連絡会議においても表明したとおり、我々は実施機関の姿勢に対して深い失望と強い憤りを感じています。</p> <p>その第37回連絡会議で我々が要望した「排砂が海洋生態系全体に及ぼす影響に関する海洋生物学の視点に立った調査」や、「濁水による魚類等への直接的・間接的影響に関する調査・分析・</p>	<p>① 海面漁業者が強い不安と危機感を抱いている事は真摯に受け止めている。不安の払拭に向けた取組として、連携操作の検討、環境調査の追加、変更を計画している。</p> <p>水生生物への影響調査については、これまで、その生息環境の変化を把握するため、水質、底質、底生生物及び動・植物プランクトンにかかる調査を行ってきた。これは、水生生物のうち、魚類は移動能力が大きく、不適な環境を回避することができるに加え、生息不適な環境にも一時的に来遊すること等も考えられ、特定地区の環境指標としては不確定な要素がある。一方、底生動物は食物連鎖の底辺に位置する重要な存在であることに加え、移動性に乏しく、限定された海域での環境条件の特性を表現しやすいため、調査指標として変化を確認してきた。</p> <p>底生動物は海洋生態系の一構成要素に過ぎないというご意見をいただいているが、底生動物は上記のとおり重要な指標であるという認識であ</p>

評価」等といった事項について、実施機関は「今後の環境調査計画に反映して参りたい」と回答したにも関わらず、今年度の実施計画に反映されていません(底生動物は海洋生態系の一構成要素に過ぎず、その影響分析調査だけでは不十分と考えます)。

仮に、今年度の計画に盛り込むことが日程的に間に合わなかったのだとしても、第50回黒部川ダム排砂評価委員会(2019年3月15日開催)において提案・検討された形跡が見当たらないことは、どう受け止めれば良いのでしょうか。

以上のように、実施機関の回答や対応は我々の不安を払拭するには至っておらず、課題解決の見通しも立っていない現状について、我々は今年度の実施計画を検討する以前の段階に留まっていると認識しています。

実施計画の内容の是非はさておき、今年度の連携排砂について敢えて申し上げれば、昨年度実施機関が強行した土砂排出行為を通常排砂として既成事実化したうえで行うものである以上、その実施に同意することはできません。

り、今年度の調査では、従来の単年の評価だけではなく過去のデータを用いて、経年的な傾向変化やその他の環境指標との関係等を評価・分析し、排砂による影響を詳細に評価することを計画している。

また、より有効な調査方法がある場合は、その実施について検討して参りたい。

昨年度の排砂については、第45回黒部川土砂管理協議会(平成31年2月19日開催)の資料-2「平成30年度連携排砂等の実施結果に関する関係団体からの意見と対応について」で報告させていただいたとおり、平成29年度の排砂中止により、平成30年度の排出土砂量が過去最大(連携排砂以降)となったものの、平成7年7月の出水後の状況とは異なるため、例年どおり、6～8月の出水に併せて実施する通常の排砂と判断したものである。

実施機関では、今後の環境調査等、科学的な見地から影響度を把握し、漁業者の不安を払拭するよう努めてまいりたい。

【令和元年度連携排砂等の実施計画について】

関係団体名	関係団体の意見	対応状況
内水面漁業 関係団体	<p>① 平成30年度で実施した連携排砂は、想像を超える土砂の堆積と川の流れに変貌をきたした。土砂の堆積は、1メートルを超えている所が何ヶ所も見受けられる。また、いたるところに見られた湧水が塞がれ、サクラマス、鮭、鮎等の産卵場所が失われております。</p> <p>棲みやすい川づくりのためにも、堆積した土砂の撤去を可及的速やかに実施されたい。さらに、瀬、淵の造成にも取り組んでいただきたい。</p>	<p>① 出し平ダムの排砂量のみならず、宇奈月ダムから河口までの土砂動態に注視し、より自然に近い形で実現できるような連携操作について検討して参りたい。</p> <p>また、湧水箇所や産卵場所の保全に努め、瀬・淵のモニタリングを行い適切な河道状態が維持されるよう取り組んで参りたい。</p>

【令和元年度連携排砂等の実施計画について】

関係団体名	関係団体の意見	対応状況
<p>内水面漁業 関係団体</p>	<p>② 連携排砂の実施は、何十年も同じ方法で実施し、最後は、「環境に大きな影響なし」と締めくくっている。</p> <p>連携排砂のやり方を変えて実施したらどうか。例えば、単独での排砂を行うとか、方法を変えて行って見てはどうか。</p> <p>また、連携排砂後の処置として、水量不足の場合は、黒四ダムからの放流を考えていただきたい。</p> <p>さらに、連携排砂時に魚類の生息状況を調べるため、黒部川で魚を入れた生簀での実験を行ってほしい。</p>	<p>② 一度に多くの土砂流出があることは、環境への影響が懸念されると思われること、また、近年、宇奈月ダムからの排砂状況も鑑み、漁業者の不安払拭に向けて環境への影響がより少なく、できるだけ自然に近い形での土砂移動が実現できるよう検討を進めたい。そして、検討の結果、メリットが大きいと考えられる方策については、実施に向けて関係機関、関係団体の皆様のご理解を得られるよう対応して参りたい。</p> <p>また、出水毎に土砂成分割合が相違していることや排砂及び通砂後の措置実施時の流況にもよるが、河道に堆積した砂がフラッシュされるようダムからの放流量や放流方法等について、引き続き効果を確認して参りたい。</p> <p>さらに、今年度はアユの生育実態調査として胃内容物について追加調査する予定である。</p> <p>実施機関では今後も環境調査等、科学的な見地から影響度を把握し、漁業者の不安を払拭するよう努めて参りたい。</p>

【令和元年度連携排砂等の実施計画について】

関係団体名	関係団体の意見	対応状況
<p>農業 関係団体</p>	<p>① 一般農家では、出し平・宇奈月ダムの連携排砂から15年以上が経過し、その必要性と対応策についての理解は深まっていると考えます。</p> <p>しかし、現在は農業情勢が大きく変化しており、担い手農家等により農地が集約され、大規模経営となりつつあります。その大規模経営者は、連携排砂の断水時期と農作業の関係に強く留意しています。</p> <p>そうした近年の農業情勢の変化を充分考慮され、連携排砂に対する理解と協力を得られるよう対策を検討願います。</p>	<p>① 実施機関では、これまでも関係市町のご協力を頂きながら、連携排砂・通砂にかかるお問い合わせや来訪者からのご意見等への対応をはじめ、勉強会及び説明会等の要請にお応えする等、様々な形で連携排砂・通砂の必要性等についてご理解が得られるよう努めているところである。</p> <p>今後も、連携排砂・通砂を実施するにあたっては、関係市町等と連携を密にし、また、関係団体とご相談等も行いながら、地域の皆さまにご理解とご協力が得られるよう、努めて参りたい。</p>

【令和元年度連携排砂等の実施計画について】

関係団体名	関係団体の意見	対応状況
農業 関係団体	② 農作業の時期的な影響を考慮し、連携排砂及び通砂により、合口用水の取水停止が長期化しないよう検討願います。	② 今後とも、関係団体と連携を密にしてご理解・ご協力を得ながら、連携排砂の実施時間が適切なものとなるよう努めて参りたい。